



## 静岡県／平成22年度医療安全管理シンポジウム(西部地区)報告

### 「患者・市民の医療参加」の必要性を多用な事例で実感

平成22年10月13日(水)、社団法人静岡県病院協会主催の平成22年度医療安全管理シンポジウム(西部地区)を浜松市地域情報センターにて開催いたしました。今回のテーマは「患者・市民の医療参加」でした。

西部地区の幹事病院として遠州病院の水上院長より「患者と医療者のお互いの信頼関係を築くことが重要」との挨拶に続き、座長を務めた遠州病院の稲本副院長は「医療事故で年間1万人以上も死亡しているという事実があり、医療人として患者も参加する医療を進めることによって少しでも医療事故を減らしていきたい」と話されました。

基調講演は「肺塞栓症・深部静脈血栓症友の会」の江原幸一氏を招き、「患者・家族の医療参加」と題してお話いただきました。江原氏は妻を術後の肺塞栓症で亡くした体験から、その死を無駄にしないよう肺塞栓症予防を訴える活動を始められたとのことでした。主治医を含め看護師が一生懸命妻の治療にあたる姿を見ていた江原氏が、深い悲しみの中で考えたことは、「医療は患者と医療者が敵対するものではない、同じ方向を向いて協力しながらできる医療を目指そう」ということでした。医療事故が起きるとすぐに訴訟に発展する昨今、医療者の真剣な姿勢と患者さん側の理解のもとに相互の信頼関係は構築されることを実感させられました。シンポジウムでは4つの発表が行われました。

1つ目は、浜松赤十字病院副看護部長の櫻井恵子氏による【「できるところから」の地域住民のカー病院ボランティア】で、病院敷地内の花壇整備、入院患者用の帽子・ポシェット(小物入れ)の作成等ボランティアによる積極的な活動が紹介されました。ボランティアの目線から職場改善活動の提案もあり、職員からボランティアに対する感謝の声も最近増えているとのことでした。

2つ目は、掛川市立総合病院看護師長の山田貴江氏による【安心・安全な医療を市民と共に―自ら名乗ることの必要性の理解に向けて―】で、掛川市のホームページ掲載やキャラクターを使ったポスター掲示等による啓発活動を行った事例の発表となりました。患者が自ら名前を名乗れるように職員側から誘導するタイミングを工夫する必要があると訴えておりました。

3つ目は、浜松赤十字病院図書室司書の飯



田育子氏による【浜松赤十字病院の患者図書室活動】で、患者さん及び家族の医療への理解を深め医療スタッフとのコミュニケーションに役立てたり、ストレスを抱えている患者さんの療養環境を快適にするよう努力しているとの報告がありました。開設当初の2006年は年間299名・142冊だった利用が、今では年間5737名・1087冊までになり、患者図書室設置の必要性を物語る発表でした。

4つ目は、JA静岡厚生連遠州病院(幹事病院)の病院長である水上泰延氏による【ひまわり会(人工肛門・人工膀胱の会)の患者さんとともに】で、当初病院主導で始まったが会員主導の患者会になり、同じ悩みを抱える患者に対し会員が患者の不安を取り除くための相談を実施したりしているとの活動報告がありました。ひまわり会の活動を通して、患者と医療者との親睦が深まり、治療におけるメンタルケアの手助けとなっているという発表となりました。

全体討論も会場から活発な質疑応答となり、今回のテーマである「患者・市民の医療参加」の必要性を痛感させられました。夕方18時から2時間30分にわたるシンポジウムは盛会のうちに終了となりました。

(報告者:JA静岡厚生遠州病院 事務次長 水野秀雄)